

中年女性の幻覚妄想状態 (第4報)

—— 女性教祖の病跡から ——

浅野 弘毅, 近藤 等, 岩淵 由佳

はじめに

わが国において、新宗教とは、明治中期の国家神道体制が確立した後に成立した一連の宗教のことを言うが、幕末維新期に成立した宗教も含めるのが通例となっている¹⁾。

新宗教の条件としては、(1) 成立宗教であること、(2) 既成宗教から独立していること、(3) 民衆を主たる担い手とすること、などがあげられて

いる²⁾。

新宗教の時代区分に関しては、いくつかの説があるが³⁾、表1に示すように3次に分けるのが一般的である⁴⁾。

わが国の新宗教は、(1) 幕末から明治にかけて、(2) 第2次世界大戦前後、(3) 石油ショック以後、の3期に集中して誕生している。

また、教祖についての分類方法もさまざまあるが⁵⁾、一例を表2に示す⁶⁾。神からの選びによる成巫型ないし召命型と自らが修行し神に近づく修行型ないし求道型の類型に、創唱型・分派型という教団の2分類をクロスさせると4つの教祖類型ができあがる。

この中、もっとも教祖にふさわしいのは、成巫・創唱型ということになる。わが国では、この型の女性教祖が多いという特徴がある。

その理由は、組織者・祭司の役割を兼ねる男性教祖に対して、女性教祖は超俗的であり、霊能者として独自の救済活動を行うからであるという⁷⁾。

今回は、それぞれの時代を代表する女性教祖を取り上げて(表3)、病跡学的な検討を加える^{8,9)}。

表1. 新宗教の時代区分

I. 第1次宗教ブーム
幕末から明治にかけて
II. 第2次宗教ブーム
第2次世界大戦の前後
III. 第3次宗教ブーム
石油ショック以後

表2. 教祖の類型

	成巫型(召命型)	修行型(求道型)
創唱型	○	
分派型		

表3. 女性教祖一覧

時代	教祖	教団	生年	神憑り	子供	没年
I	一尊如来きの	如来教	1756年	47歳		70歳
	中山 みき	天理教	1798年	40歳	1男5女	90歳
	出口 ナオ	大本教	1836年	56歳	3男5女	81歳
II	北村 サヨ	天照皇大神宮教	1900年	44歳	1男	67歳
III	亀井美代子	太陽を信じる ピラミッドの会	1931年	44歳	2男2女	

症 例

[症例1] 一尊如来きの

如来教教祖の一尊如来きのは、1756(宝暦6)年2月2日、尾張国愛知郡旗屋の農民の3女として生まれた。生家は古い家柄で、宗旨は念仏であったが、先祖には神官がいたともいう。8歳で両親と死別し、伊那に住む伯父のもとで育てられた。兄弟の消息は不明で、幼少から孤児同然の身の上であったらしい。

伯父の家は貧しかったので、13歳になると名古屋城下の漢方医のもとへ女中奉公に出された。23歳で暇をとり、ほど近い海部郡蟹江村の農民庄次郎に嫁した。この結婚は夫の不身持ちからいくばくもなく破れ、再び女中奉公に出た。奉公先は、尾張藩の重役石河家で、同家の隠居に仕えた。隠居の死を機に、40歳で同家を辞し、旗屋の里に戻った。礼金と貯えておいた給金を合わせて生家を買戻し、女手ひとつで農業を営むかたわら、一文商いを始めた。近隣の人々を心から愛し、周囲の評判も良かったという。

しかし、初老から踏み込んだ農民生活は、身体的にかなり厳しいものであった。夫もなく、孤立した女ひとりの生活への激変は、精神的にも絶え間ない緊張を強いることとなった。47歳で突然神がかりに陥り、金比羅大権現が天降ったとして、天地を創造し主宰する神「如来」の教えを説き始めた。神がかりしたきのの所へ現世利益を求める人びとが集まりだし、きのは束帯を身につけて金比羅の言葉などを説き続けるようになった。きのの説教は、信者となった尾張藩士数名によって筆録され、『お経様』として収録されている。70歳で死亡^{1,10-13)}。

[症例2] 中山みき

天理教教祖の中山みきは、1798(寛政10)年4月18日、大和国山邊郡三味田村の地主前川家に生まれた。宗旨は浄土宗。二男三女の長女であった。7歳から家事、農業を手伝うかたわら、父から字を習い、9歳から3年ほど寺子屋に通って、習字、算術などを学んだ。体が弱く、内向的な性格で、ひ

とりで習字、裁縫、細工物に熱中したという。10歳頃から寺参りを楽しみにし、11歳の時、神仕えがしたいと両親にせがんだと伝えられている。12歳で庄屋敷村の中山家に嫁した。みきは、この結婚を嫌い、朝夕の念仏勤めと寺参りの自由を条件に承知したという。15歳で「へらわたし」(主婦権の譲渡)を受けた。

地主の主婦として、重い責任と激しい労働に心身をすり減らす毎日であった。夫は、家業に不熱心で金と暇にまかせて放縱な生活を続けるばかりであった。17年間に1男5女を出産したが、32歳で3歳の次女、35歳で2歳の4女を失っている。39歳の時、長男が左足の病気に罹り、足の痛みが快方に向かわないため、寄加持をくり返した。同年、5女を産んだが、産後不調。

40歳、10回目の寄加持のおりに、みずから進んで加持台になった。護摩を焚き、陀羅尼を誦している間に、突如、神がかりになり、3日3晩にわたって続き、水も食物もとらずに神の座に坐り続けた。夫が家長権を放棄し、みきを神の社として差し出すと答えたことで、激しい神がかりはおさまった。自分を「天ノ將軍」と名乗り、肉体に宿った神との対話が始まった。43歳で最後の妊娠したが、7ヶ月で流産。断続する10年の神がかりののちに、ようやく精神の安定をえた。「帯屋ゆるし」と称する安産と病気治しの術によって、次第に信者を獲得した。69歳のとき「天理王明神」として公認を受け、71歳から『御筆先』を書き始め、90歳で亡くなった^{1,12-21)}。

[症例3] 出口ナオ

大本教教祖の出口ナオは、1836(天保7)年12月16日、丹波国福知山紺屋町の大工職桐村家に生まれた。9歳で父を失い、住み込み奉公を続け、16歳で叔母出口ユリの養女となった。辛抱よく無口な性格であった。19歳で政五郎を婿に迎えたが、夫は、酒好きの浪費家であった。出口家はつぎつぎに田畑、家屋敷を手放して没落の一途をたどった。46歳で5女を産むまで、25年間に11人の子を産み、そのうち8人が成人した。48歳の時、一家が破産した。夫は中風になり、翌年、仕事場

で重傷を負い、そのまま寝ついてしまった。同じ頃、大工見習いに出っていた長男が、仕事のつらさに耐えかねて、自殺未遂のあと行方不明となった。2人の重病人を抱え、3人の幼児を育てるために、ポロ買いや糸ひきの質仕事で生活を支えなければならなかった。51歳の時、夫が病死。54歳の時、3女の産後の肥立ちが悪く、神がかりとなり、金光教の布教師の祈禱でおさまった。55歳の時、長女が精神に変調を来し、狐憑きということにされて、妙見や、稲荷の加持祈禱がくり返された。

56歳の時、13日間断続して激しい神がかりに陥った。身体が重くなり、腹に何者かが宿った感じで、腹の中の生きものと問答すると、相手は「良の金神である」と名乗った。57歳、放火の嫌疑がかり、警察に留置された。これを機に、年来のナオの神がかりに手を焼いていた婿は、警察に願ひ出て、座敷牢に閉じ込めてしまった。座敷牢の生活は、40日に及んだが、神の命ずるままに、落ちていた釘を拾い、柱に文字を書きつけた。ナオは、もともと無筆であり、数字すら満足に読めなかったが、柱には、ひらがなで文章らしいものが刻まれていた。これが、『大本神諭』の始まりとされている。

63歳の時、王仁三郎と出会い、大本教を開教。81歳で死亡した^{1,12,13,22-26}。

[症例4] 北村サヨ

天照皇大神宮教祖の北村サヨは、1900(明治33)年1月1日、山口県玖珂郡日積村の農家に生まれた。熱心な真宗門徒であった両親に連れられて、よく墓参りをした。活発で勝気な性格であった。尋常小学校を卒業後、裁縫塾へ通ったり、紡績工場の女工をしたのち、21歳で山口県熊毛郡田布施町の農家北村家に嫁いだ。1男を設けた。3年間に6人も嫁をとりかえたという吝嗇家の姑にいじめられ、こき使われながら、約20年間かいがいしく働いた。40歳の時、姑が死亡。42歳の時、自宅から出火、近くに住む稲荷行者の教えを受けて修業した。また出征中の長男が軍の文書を紛失したことが伝わり、周囲から白眼視されて苦悩した。

44歳で神がかり、腹の中の神との問答が始まっ

た。神は「とうびょう」、口の番頭、天照皇大神、皇大神とつぎつぎに入れ替わった。ついにはサヨの口を直接使って歌い出したり説法までし始めた。神がかり後は、大抵の人を「蛆の乞食」「国賊の乞食」などと罵倒するようになった。1945(昭和20)年、自宅に人を集めて説法を開始。新たに天照皇大神が降臨したという自覚を持った。敗戦直後から、神の独り子、救世主であると宣言し、神国実現をよびかけ、1946(昭和21)年を神の国開元の「紀元元年」とした。また、東京に進出し、都心の数寄屋橋で、救われた喜びを踊りであらわす無我の舞を演じ、『踊る宗教』としても有名になった。67歳で死亡^{1,13,27-30}。

[症例5] 亀井美代子

太陽を信じるピラミッドの会教祖の亀井美代子は、1931(昭和6)年1月10日、北海道網走管内留辺蘂町に、9人兄妹の末子として生まれた。家は駅亭を兼ねた農家で、4歳の時、母が病気で死亡。そのため学校でいじめられた。性格は勝気。兄7人のうち2人が第2次世界大戦で病死。1人の兄は小さい頃、囲炉裏に落ちて焼死した。高等小学校を卒業後、17歳で農薬会社に就職し10年働いた。27歳で、5歳下の同僚と結婚。夫の酒乱と暴力、家出、別居、また同居という生活が続く。結局は夫のサラ金がひき金となって離婚した。20数年の結婚生活で18回も引っ越しをした。

4人の子どもを抱え厳しい生活が続いていた44歳の時、夢の中で「信仰で人を救え」とお告げがあり、押入れの壁に釈迦、部屋の天井に竜神が見えた。45歳、神示を受けて太陽を信じるピラミッドの会を創設した。会員に太陽を崇め、先祖を供養することの大切さを説き、会員の先祖や各界の著名人の供養を行う。また、手を握り電波を送ることによって会員はカラーでいろいろなものが見えたり、声が聞こえたりするといい、これを瞑想と呼んで会員を指導する。必要な場合には、お祓いによって病気を癒すこともある。毎日のように神の声が聞こえ、会の名称、唱える経を般若心経と告げられた。1981(昭和56)年に宗教法人の認可を受けた^{13,31,32}。

表4. 女性教祖の特徴

1. 背景	シャーマニズムの伝統と社会変動の時代
2. 生活史	貧困と苦難のなかで通俗道徳を模範的に実践
3. 中年の危機	夫との不和や家族の病と死
4. 神がかり	男神との聖婚をはたし両性具有性を獲得
5. 新たなアイデンティティの形成	男性の支配と家の重圧からの解放

[症例のまとめ]

以上見てきた女性教祖について、共通する特徴をまとめてみる。(表4)。

第1に、誕生の背景として、シャーマニズム文化の伝統と社会経済的な時代の変動や動乱があげられる。

第2に、教祖たちの生活史に共通しているのは、貧困や家庭的苦境のなかで、最底辺の生活を経験しながら、逆境にあっても、その時代の通俗道徳を模範的に実践しようと努力していることである。

第3に、抑圧され鬱屈した生活は限界に達し、中年期に至って破綻を来している。直接の引き金は、夫との不和・離婚や家族成員の病気や突然の死亡などである。

第4に、女性教祖は自己を神格化するにあたり、神がかり体験を通して男神との聖婚をはたし、両性具有的性格を獲得している。

第5に、この神がかりによって、家父長制度の根幹である男性の支配と家の重圧から解放されて、新しいジェンダーアイデンティティを形成している。

考 察

1. 教祖誕生の背景

宗教学的見地からは、わが国の新宗教の源流は、(1) 民俗宗教、(2) 日蓮系の在家講、(3) 民衆の修養道徳運動、に求められるという。わが国の民俗宗教は、仏教や神道や地域の習俗的信仰などをさまざまに取り込んでおり、習合宗教(Syncretic

cult) としての特徴を有している⁵⁾。

宮本³³⁾は、教祖の生まれやすい条件のひとつとして、多神教系の神道の影響を重視した。

村上¹⁾によれば、新宗教を生みだしたエネルギーは、「既成宗教の顕齋的な儀式教義の底に眠っている日本人の基層文化の活性化」にあるという。

その際、活性化されるのは、シャーマニズムの伝統である。シャーマニズムは、「実践者が自らの意志で変性意識状態に入り、その状態において、自らもしくは自らの靈魂が自在に異界を旅し、別の存在と交流を交わすことで共同体に奉仕することに焦点を合わせた伝統の一系譜」³⁴⁾と定義される。

教祖の生活史や宗教活動を検討すると、シャーマニスティックな宗教者としての出自を持つ者が多い³⁵⁾。

佐々木³⁶⁾は、個々のシャーマンは、伝統的、地域的な種々の宗教概念、行動様式を無差別的に内に包み込み、いわば竜巻状の形をとっていると指摘している。

今回取り上げた女性教祖も、シャーマニズムの伝統を基盤に、既成の宗教、地域の習俗宗教、その時代の修養道徳などを広範囲に取り込んで成巫している。

ところで、新宗教は、社会秩序や価値体系が崩壊の危機に見舞われたとき、古い権威や支配層に対する民衆の側からの批判と救済願望に基づく世直しの運動として発生する。3次にわたる宗教ブームの時代とは、まさにそうした価値の変動と動乱の時代であった³⁷⁾。

宮本³⁸⁾は、「社会的変動や価値体系の動揺を来しているような時代と、迷信的な風土は、病的教祖が自分の周囲に病的な信仰集団を作る機会を与える」と述べている。

しかし、どこが時代の影響なのか峻別は困難で、印象論に過ぎないとする批判も一方にはある³⁹⁾。

2. 女性教祖の生活史

女性教祖の多くは、一般的にエリート層からは出現しない。比較的到低い社会階層の出身者が多く、その人生で貧困や病気など辛い体験をしてい

る。彼女たちには、苦しい生活のなかから突然回心体験が生じている。

女性教祖の生い立ちに共通している点としては、(1) 幼い頃から勤勉実直な生活を送り、当時の社会規範を模範的に実践した庶民女性であったこと、(2) 通俗道徳の模範的な生き方をしたにもかかわらず、貧困と苦難の半生を送っていること、(3) 夫婦や親子関係など家庭的にも恵まれない境遇にあったこと、(4) 家族の生活の糧を得る責任も一身に担っていたこと、などがあげられる⁴⁰⁾。

彼女たちは、非常な努力をして生きてきたにもかかわらず、中年に至って決定的な不幸に直面する。不幸の源は不和、離別、病気や怪我など家族の災厄である。さらに、退行期に特有な心身の変調も重なっている。

彼女たちは、元来の性格から、一層必死になって努力を続ける。そして、実りのないあがきの果てに、神がかりを体験し、そのことを媒介にして、個人的な不幸を社会的文脈に置き換えるのである。

水野は、「憑依体験という個人的な内的体験における物語の作用には、現実の世界で損なわれたものを想像的に補填すると同時に、現実に対し肯定的な意味付与をする機能がある」⁴¹⁾と指摘している。憑依体験が、外から意味づけられることで、周囲の人は、彼女たちを単なる病者として扱うことをやめ、教祖とみなすようになり、彼女たちの内的体験が小集団のなかで共有されるようになるというのである。

女性教祖たちは、その共通する生活史から、社会や家を底辺から支えているのは庶民の女たちであるという自負を持ち、貧困と苦難を体験した女でなければ救済者の条件を満たさないと考えていた⁴⁰⁾。

新宗教では、教祖のみならず、信者も中年女性が圧倒的に多いが、その理由は、教祖の生活史に対する共感に存するのであろう。

もちろん、教祖の自叙伝に潜むフィクションの陥穽については、自覚的でなければならない⁴²⁾。

3. 女性教祖とジェンダーアイデンティティ

女性教祖は、神がかり体験によって、男神との聖婚をはたし、両性具有性を獲得して、自己の神格化をはかっている。そして、家父長制度に象徴される男中心の社会や家制度に対して、激しい批判を加えている。

女性教祖たちの、救済者は女でなければならないという主張の裏には、男性に対する不信感がある。

山下は、近代以降の日本で、既婚の女性シャーマンが続出した理由として、「古代の霊力との文化的なつながりよりも、日本の家父長制社会における女性抑圧の構造的特徴がまず考えられねばならない」⁴³⁾とした。

ところが、女性教祖たちは、いずれも自己の中に男性的要素を付け加えている。どの教祖も男女両性の具有者としての性格を持っているのである。

妻鹿⁴⁰⁾は、男尊女卑思想が色濃く反映する社会にあって、女性教祖およびその教えが権威づけられるために、自らの中に男性的要素を付加する必要があったと説明している。そのうえで「女性教祖たちは、ともに女を高く評価しつつも、全き人間生活を営むためには、男女両性の和合が必要であることを強く認識した結果、自己の内に男性的要素を内包させることによって、教祖自らが、両性具有者として完全な救済者になりえたのである」⁴⁰⁾という。

Hardacre, H.⁴⁴⁾は、女性教祖たちが、いかなる審神者の役割も拒否した神がかりの体験の後に、一人の人格内に男女両性のジェンダーを包括し、その人格が、人界と神界の仲介をするのであると述べている。

また、薄井は、「彼女たちの両性具有的自己認識は、神との『聖婚』すなわち自分の女性性と男性性の発見そして両性を備えた調和的自己への再生体験というべき新しい性自認(gender identity)の確立への営みの中から」⁴⁵⁾生じたとしている。

さらに、宮本⁴⁶⁾によれば、女性教祖においては、その神がかり的体験を通して体現される神が、荒ぶる神、厳格な神、命じる神として〈男性的な〉ジェ

ンダーを帯びており、身体を媒介とする教祖との緊張関係の中で、やがて両性具有的性格を獲得していくという。その結果、「〈男性的なるもの〉と〈女性的なるもの〉はコスモロジカルな地平において『全・一』的な『宇宙的宗教性』をシンボリックに開示する宗教的意味を帯びたジェンダーとなる」⁴⁶⁾と主張している。

さて、筆者らは、先に第1報⁴⁷⁾で『喪失の不安と退行期妄想症』、第2報⁴⁸⁾で『夫婦関係の希薄化と性愛妄想』、そして第3報⁴⁹⁾で『窮地からの脱出としての憑依体験』について報告した。

今回報告した女性教祖の成巫過程と対比してみる時、女性のライフサイクルにおける中年期とは、ジェンダーアイデンティティが解体の危機に直面する時期であり、あらためてジェンダーアイデンティティを構築し直す時期であることが分かる。

蓋し、われわれの患者たちは、そのことに失敗し、女性教祖たちは、Winkler, W.⁵⁰⁾のいう自我神話化 (Ich-Mythisierung) の機制を用いて自己治癒に成功したという言い方ができるかも知れない。

おわりに

わが国における新宗教の誕生は、(1) 幕末から明治にかけて、(2) 第2次世界大戦の前後、(3) 石油ショック以後、の3期に集中している。

教祖については、成巫・創唱型の女性教祖が多いという特徴がある。

本報告では、それぞれの時代を代表する女性教祖、一尊如来きの(如来教)、中山みき(天理教)、出口ナオ(大本教)、北村サヨ(天照皇大神宮教)、亀井美代子(太陽を信じるピラミッドの会)を取り上げ、病跡学的検討を加えた。

女性教祖の多くは、貧困と苦難の半生を送っており、逆境にあっても、その時代の通俗道徳を模範的に実践しようと努力していた。

そして、中年に至って家族の災厄という決定的な不幸に直面し、回心を体験している。神がかりには、退行期の心身の変化も深く関わっているものと推測される。

女性教祖は自己を神格化するにあたり、神がか

りを通して男神との聖婚をはたし、両性具有性を獲得している。そして、この神がかりによって、男性の支配と重圧から解放され、新しいジェンダーアイデンティティを形成していた。

女性のライフサイクルにおける中年期とは、ジェンダーアイデンティティが解体の危機に瀕する時期であり、同時にジェンダーアイデンティティを再構築する時期でもあることを強調した。

[本論文の要旨は、第50回東北精神神経学会総会(1996年9月28日、山形)において発表した]

文 献

- 1) 村上重良: 日本宗教事典, 講談社, 東京, 1988.
- 2) 島藺 進: 現代救済宗教論, 青弓社, 東京, 1992.
- 3) McFarland, H.N. (内藤 豊 他 訳): 神々のラッシュアワー—日本の新宗教運動—, 社会思想社, 東京, 1969.
- 4) 西島建男: 新宗教の神々—小さな王国の現在—, 講談社, 東京, 1988.
- 5) 井上順孝 他編: 新宗教事典, 弘文堂, 東京, 1994.
- 6) 渡辺雅子: 分派教団における教祖の形成過程, 宗教社会学研究会編: 教祖とその周辺, p 111, 雄山閣出版, 東京, 1987.
- 7) 梅原正紀: 教祖と信者たち, 清水雅人 他編: 新宗教の世界 I, 新宗教の諸問題, p 45, 大蔵出版, 東京, 1979.
- 8) 宮本忠雄: パトグラフィー, 井村恒郎 他編: 異常心理学講座9, 精神病理学3, p 397, みすず書房, 東京, 1973.
- 9) 宮本忠雄: 教祖のパトグラフィー, 現代精神医学体系25, 文化と精神医学, p 191, 中山書店, 1981.
- 10) 一尊如来きの, 村上重良校注: お経様, 平凡社, 東京, 1977.
- 11) 村上重良: 一尊如来きのと如来教・一尊教団, 村上重良 他校注: 日本思想体系67, 民衆宗教の思想, p 571, 岩波書店, 東京, 1971.
- 12) 村上重良: 教祖—近代日本の宗教改革者たち—, 読売新聞社, 東京, 1975.
- 13) 井上順孝 他編: 新宗教教団・人物事典, 弘文堂, 東京, 1996.
- 14) 神山 誠: 教祖・中山みき伝, 虎見書房, 東京, 1970.
- 15) 天理教教会本部編: 稿本天理教教祖傳, 天理教道友社, 天理, 1956.
- 16) 天理教教会本部編: 教祖御傳筆記, 天理教教会本

- 部修養科, 天理, 1963.
- 17) 天理教教会本部編: 稿本天理教教祖伝逸話篇, 天理教道友社, 天理, 1976.
- 18) 天理教同志會編: 訂正増補天理教祖, 天理教同志會出版部, 天理, 1931.
- 19) 中山みき, 村上重良校注: みかぐらうた・おふでさき, 平凡社, 東京, 1977.
- 20) 村上重良: 中山みきと天理教, 村上重良 他校注: 日本思想体系 67, 民衆宗教の思想, p 599, 岩波書店, 東京, 1971.
- 21) 藪 景三: 天理教教祖中山みき, 鷹書房, 東京, 1995.
- 22) 伊藤栄蔵: 大本一出口なお・出口王仁三郎の生涯一, 講談社, 東京, 1984.
- 23) 大本 70 年史編纂会編: 大本 70 年史 上巻, 宗教法人大本, 亀岡, 1964.
- 24) 出口ナオ, 村上重良校注: 大本神諭天の巻, 平凡社, 東京, 1979.
- 25) 出口ナオ, 村上重良校注: 大本神諭火の巻, 平凡社, 東京, 1979.
- 26) 安丸良夫: 出口なお, 朝日新聞社, 東京, 1977.
- 27) 小野泰博: 「南無妙法蓮華経」と「名妙法蓮結経」—創価学会と天照皇大神宮教—, 現代のエスプリ, **116**, 191-196, 1977.
- 28) 香川 檀: 北村サヨ, 朝日新聞社編: 二十世紀の千人 8, 教祖・意識変革者の群れ, p 226, 朝日新聞社, 東京, 1995.
- 29) 滝 泰三: 神々多忙—新宗教教祖列伝—, 新夕刊新聞社, 東京, 1956.
- 30) 渡辺雅子: 救いの論理—天照皇大神宮教の場合—, 宗教社会学研究会編: 宗教の意味世界, p 98, 雄山閣出版, 東京, 1980.
- 31) 朝日新聞社会部編: 現代の小さな神々, 朝日新聞社, 東京, 1984.
- 32) 亀井美代子: 太陽からのメッセージ—UFO は先祖の靈魂—, 鷹書房, 東京, 1986.
- 33) 宮本忠雄: 日本型教祖の成立, こころの科学, **43**, 55-59, 1992.
- 34) Walsh, R. (安藤 治, 他訳): シャーマニズムの精神人類学, 春秋社, 東京, 1996.
- 35) 川村邦光: 教祖のドラマツルギー—カリスマの制度化と継承—, 宗教社会学研究会編: 教祖とその周辺, p 135, 雄山閣出版, 東京, 1987.
- 36) 佐々木宏幹: シャーマニズムの世界, 講談社, 東京, 1992.
- 37) 島蘭 進: 教祖と宗教的指導者崇拜の研究課題, 宗教社会学研究会編: 教祖とその周辺, p 11, 雄山閣出版, 東京, 1987.
- 38) 宮本忠雄 他: 宗教病理, 井村恒郎 他編: 異常心理学講座 5, 社会病理学, p 133, みすず書房, 東京, 1965.
- 39) 井上順孝: 新宗教の解説, 筑摩書房, 東京, 1996.
- 40) 妻鹿淳子: 創唱宗教における女性教祖の母性観, 脇田晴子編: 母性を問う—歴史的変遷—, p 71, 人文書院, 京都, 1985.
- 41) 水野美紀: 出口なおの病いと信仰, 臨床精神医学, **21**, 1831-1837, 1992.
- 42) 中村恭子: 宗教的自伝の語りと読み, 脇本平也 他編: 現代宗教学 2, 宗教思想と言葉, p 31, 東京大学出版会, 東京, 1992.
- 43) 山下明子: 新宗教の女性の解放と限界, 大越愛子 他編: 性差別する仏教, p 165, 法蔵館, 京都, 1990.
- 44) Hardacre, H. (中村恭子 他訳): 新宗教の女性教祖とジェンダー, 脇田晴子 他編: ジェンダーの日本史, 上, p 119, 東京大学出版会, 東京, 1994.
- 45) 薄井篤子: 女性教祖の誕生, 宗教研究, **61**, 345-380, 1987.
- 46) 宮本要太郎: 男性教祖と女性教祖, 宗教研究, **64**, 347-370, 1990.
- 47) 浅野弘毅 他: 中年女性の幻覚妄想状態 (第 1 報)—退行期妄想症再考—, 仙台市立病院医誌, **14**, 3-10, 1994.
- 48) 浅野弘毅 他: 中年女性の幻覚妄想状態 (第 2 報)—性愛を主題とする妄想—, 仙台市立病院医誌, **15**, 25-31, 1995.
- 49) 浅野弘毅 他: 中年女性の幻覚妄想状態 (第 3 報)—憑依体験—, 仙台市立病院医誌, **16**, 25-31, 1996.
- 50) Winkler, W.Th. et al: Die Ich-Mythisierung als Abwehrmaßnahme des Ich, dargestellt am Beispiel des Wahneinfalles von der jungfräulichen Empfängnis und Geburt bei paraphrenen Episoden. Nervenarzt, **30**, 75-81, 1959.